

2023年5月14日 No.3667

先週の講壇から “ ロバがしゃべる!?”

民数記 第22章 22節～35節

聖句「わたしはあなたのろばですし、あなたは今日までずっとわたしに乗ってこられたではありませんか。」(22:30)

1. 《血が通い合う》 「熱い戦争」に対して「冷戦」があるように、各々が育った家庭にも「冷たい家庭」と「熱い家庭」があります。喧嘩をしない家庭では、各人が感情を押さえ込んで、自分の中で処理しようとします。それに対して、家族が食卓を囲みながらも、始終、言い争いをしているような家庭もあります。一見すると「冷たい家庭」は平穩無事に思われますが、コミュニケーションが少なく、体で言えば血行不良、「血の通わない関係」になってしまっているのです。
2. 《バラムとロバ》 バラク王の懇請を受けて、魔術師のバラムはイスラエルの民を呪うために出発しますが、愛用のロバが道を進まず、何度も杖で打ち叩きます。すると、ロバが喋り、バラムの不当な仕打ちを告発します。実は、行く先には、主の御使い(神御自身)が抜き身の剣を持って立ち塞がっていました。しかし、賢者の代表であるはずのバラムの目には見えず、愚鈍の代表とされるロバの目には見えていたのです。「あなたの命令に一度でも背いたことがあったか？」というロバの問いに、バラムが素直に「いや、なかった」と応えた時、彼にも漸く危険な現実が、ハッキリと見えたのでした。カトリック教会の公認聖書「ウルガタ」では「アシナ／雌ロバ」です。夫婦喧嘩、夫婦漫才を思わせる一幕です。
3. 《目が開かれる》 ロバの言う「私はあなたの何であるのか」という言葉が大切なのです。無関係、無責任な立場で物を言っているのではないのです。バラムが斬り殺される時には、ロバも斬り殺される、そのような一心同体の関係の中で、ロバは危険を訴えています。そのパートナーシップに気付いた時に、バラムの目は開かれました。親密な関係には、相手への責任と義務が伴います。だから、バラムに何度も打ち叩かれようと、ロバは動こうとしませんでした。ロバの連帯感がバラムの命を救ったのです。ロバは自分の命を惜しんでいたわけではありません。長年連れ添ったバラムの命をこそ惜しんでくれていたのです。

朝日研一朗牧師